

議 事 調 書				
事 案 の 表 示		令和6年度第2回聖籠町総合教育会議		
場 所		聖籠町役場 第3会議室		
日 時		令和6年11月19日(火)午前9時30分から午前10時30分		
出 席 者	会議構成者	聖 籠 町 長	西脇 道夫	
		副 町 長	高松 光志	
		教 育 長	近藤 朗	
		教 育 委 員	佐藤 政志	
			佐久間千都	
			高橋 真弓	
			高橋 恵	
	事 務 局	総 合 政 策 課	課 長	高橋 誠司
			課長補佐	小林 幸宏
		子 ども 教 育 課	課 長	佐藤 寿
		教 育 未 来 課	課 長	須貝 克徳
		聖 籠 中 学 校	校 長	丹後 直子
【会議の要旨】 別紙のとおり				

議事	聖籠中学校の教科センター方式について
町長	議題は、前回に引き続き聖籠中学校の教科センター方式についてであるが、まずは、前回の会議で質問のあった当時視察に行った学校の現状について、事務局から報告をお願いしたい。 その後、その内容について皆さんからご意見をいただきたいと思う。
総合政策課 課長補佐	当時、視察に行った教科センター方式を導入していた学校の現在の状況は、現在も教科センター方式を実施している学校が7校、やめた学校が1校であった。(この調書では学校名は非掲載。) また、全国における教科センター方式の導入状況については、国県等による統計がないため、数字は捉えきれなかったが、ホームページで調べる限りでは極めて少なく、新潟県では聖籠町が唯一である。 次に、教科センター方式のメリットとデメリットとやめた場合はその理由と影響等も併せて聞いているので報告する。 最初にA校について。 メリットは、 ・今求められている協働的な学び、探究的な学びなどは、教科センター方式によって施設面から特徴を出していくことができると考えている。場合によっては個別最適化された学びに対応しやすい。 ・生徒自ら教室を移動し、学習することで、学習の主体は生徒自ら進んで学ぶという意識付けができる。 ・教科に特化した掲示や道具を置くことができ、その教科の特性に合う雰囲気づくりができる。また、学習の履歴を振り返る掲示もできる。学習プリント、ドリルプリントなどを設置し、生徒が自分で選んで自習に使ったり、家庭学習に活用したりするなど、自主性を育める教室として機能させることができる。 ・各教科専用の座席配置ができ、教科担任の総意で意図的な学習班を設定できる。生徒にとっても教科で席が変わるという点で飽きが来ない。 ・教科担任が生徒を教室で迎える。授業が終わっても教科担任が教室で残り質問を答えるなど、その教室に行けばその先生に会えるという場所になり、教師・生徒間の距離を近づける効果がある。 ・担当教師が教科教室の経営をするという意識づけは、教科により積極的な教材研究事業研究につながる。 ・教室移動など、生徒の活動場面が増えることで生徒同士の人間関係など顕著になる。孤立傾向の生徒、人間関係の変化に教師が気づきやすい。 ・教材教具の準備をして教科教室に移動する必要があるので、見通しをもって自己管理をしていく能力が育つ。 ということであった。 次にデメリットは、 ・集団への不適応を起こしている生徒にとっては教室移動、毎回変わる座席はスト

	レスとなる。(別室登校生徒、不登校生徒) ・教科センター方式のメリットを知らない、意識できない教科担当だと有効活用できず、単に煩わしいだけのシステムとなる。 ・生徒指導困難校など、基本的な生活習慣が身につけていない集団がこの教科センター方式で学ぶのは難しい。生徒になぜ教科センター方式で学ぶのかについて、しっかり目的を教えていくことが大切である。 ・教室の指導だけでなく、教育活動全体で「自立・自律」を目指していかないと形だけのシステムになる。生徒への連絡は校舎中央にあるホワイトボードで行い、基本的に校内放送は使用しないため、生徒が自分でホワイトボードを見て、授業の変更や準備物など確認することを習慣づけている。ノーチャイムなども含めて、生徒が自ら学ぶ、自主的に動くことができるようになるようにしていくことが大切である。 ・コロナ対策、インフルエンザ対策など感染症が流行っている時期は移動教室が仇となることもある。 ということであった。 次にB校について。 メリットは、A校と同じ自治体であるため基本的に同じであるとのことだが、 ・教師ステーション(学年フロアの中心に教師の詰所のような部屋がある)を採用し、より生徒たちの活動場所に近いところに教師がいる工夫をしている。 ・同一学年に複数のクラスがあるので、作品の鑑賞、意見交流など同じ教室を使用するので学びの環境を充実させやすい。 ということであった。 次にデメリットは、 ・比較的規模が大きい校舎なので、10 分間の行間だとすぐに準備をして移動しないと間に合わない。自分の教室でゆっくりしたい。タイプの生徒にとっては忙しく感じる。 ということであった。 また、ここの教育委員会の方からもコメントをいただいている。 ・教科センター方式の狙いや効果を十分に教師が理解する必要がある。中には、教科センター方式に反対の教師もいる。そのような先生たちにも前向きに教科教室経営に取り組んでもらう必要があるため、教師に対するガイダンスは必須である。そのため、4月に職員会議で教科センター方式に関する研修時間を設定し、ねらいや効果を周知している。 ・生徒に対しても同様のガイダンスが必要である。全教育活動で「自立・自律」を目指した取り組みをしていく必要がある。ノーチャイムをはじめとして、自分で今何をしなければならないか「指示を受けて動く」のではなく、「自ら動く」習慣づけが必要である。 というものであった。 次にC校について。 メリットは、
--	--

	・教員の業務が他の業務と区別しやすく、効率よく教科指導の準備や個別指導の対応ができる。同じ教科の教員同士の交流がしやすい。 ・教科特有の準備物が揃っている。また掲示物等が充実しやすい。 ・生徒が教科の担当教室に質問しやすい。また、教師は生徒に個別指導などをしやすい。 次にデメリットは、生徒指導の課題として ・移動が多く落ち着かないため注意や指導が増える。 ・持ち物の管理指導が増える。 ・ロッカーと学習場所が離れているため、準備不足だと離室生徒が増える。 ・異学年の不要な交流が増える。 ・教科室型の特性を生徒が理解したり自覚する意識が低い。 教師間の課題は、 ・学年経営において、教員間の共通理解も含めて配慮事項が増えるため、やりにくさを感じる。 ・教科の特性や学年指導のバランスが難しい。 ・行事等のため、ホームベースの教室と教科移動が錯綜する。 ということであった。 次にD校について。 メリットは、 ・オープンワークスペースや特別教室を柔軟に活用しながら授業を行える。 ・英語では隣の教室を気にせず会話活動などができる。 ・ICT 環境の準備がスムーズにできる。 ・教科の雰囲気に入りながら授業を行え、生徒の意欲向上にもつながっている。 ・教科に関する資料が一か所にあり、参考になる。 デメリットは、 ・生徒の荷物を置く場所が近くにない。 ・学校掲示物を貼ることができない。 ・ホームルームとホームベースが分かれているため、生徒の荷物の管理が難しい。 ・移動が負担。 ・忘れ物、落し物が多くなる。 ・目の行き届かない所でトラブルが起こることがある。 ということであった。 次にE校について。 メリットは、 ・教室環境を各教科ならではの掲示物、レイアウト、展示物などにすることができる。 ・教科の教員が教科教室にいるため、生徒を出迎えることができる。 ・教科の教員が教科教室にいるため、休み時間等に質問を受けることができるとともに、コミュニケーションを図ることができる。 ・学習センターは、主に授業準備や教科会の場として教員が利用している。教員同
--	--

	士の情報共有や教材研究を深める効果がある。 ・毎時間の移動教室により、他学年や他クラスの生徒との人間関係の「流動性」が図られる。 ・ホームルーム教室を設けている（荷物当はロッカールームを使用）ため既存の学級集団づくりを通して、それぞれの学級への所属感も醸成することができる。 ・校舎内に様々なスペースがあるため、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業を創造するための思い切った空間の利用ができる。 ・同じエリアで同時に異学年の授業を実施していることで、工夫次第で異学年交流を体験させることができる。 ということであった。 デメリットは、 ・生徒数の減少に伴い、教科ごとの教員数も減少している。特に技能教科は 1 人のみである。同じ教科の教員で打ち合わせをする必要性や機会が減り、学習センターの活用が少なくなった。 ・学習センターは生徒の出入りもできるため、個人情報や情報端末を置いておくことができず、教員は主な仕事を研修室で行っている。そのため、学習センターに教員が不在である時間が多く、生徒の交流の場になるような有機的な活用ができていない。 ・生徒にとって学習センターは課題の提出場所という認識であり、教員に学習に関する質問をするような場面は多くない。 ・生徒指導の面ではロッカールームが死角になってしまうという課題がある。そのため盗難や紛失、荷物の取り違いなど生徒指導上の問題が起きる可能性がある。 ・全ての教科が教科教室制のため、毎時間荷物を持つての移動となる。そのため、1 年生などは準備遅れのため事業が遅れる場合がある。 ・教員が自分の学級をホーム（拠点）としてみるのが難しい。生徒を管理する上で、従来のシステムからの発想転換が必要である。 ということであった。 次に F 校について。 メリットは、 ・各教科教室で学習の足跡等の掲示や教材等の展示等を実施することで、教科の特色を出した教室経営ができる。そのため、現在行っている授業だけでなく、今後の単元の内容などにも事前に触れることができ、各教科の授業における生徒の興味・関心を高めることができる。 ・授業に必要な教材を配置したり、必要な情報を予め掲示したりできるため、授業ごとに教材・教具等を持ち運んだり、掲示したりする準備等の時間が短縮できる。 ・移動教室を伴うため、生徒自身が日課を把握し、主体的に行動することができるようになる。 ということであった。 デメリットは、 ・移動教室が多くなるため、生徒の休憩時間が若干短くなる。」「教科の授業の荷
--	---

	物をもって移動教室をするため、生徒は、授業を受けるのに持ち運ぶものが多いになる。 ということであった。 次にG校について。 メリットは ・教科担任が次時の準備（特に ICT 関係）の手間が省ける。 ・教室の掲示物は教科に関係するものを貼ることができる。 ・黒板の代わりにホワイトボードが充実している教室は英語教室など、教科の特性に応じた教室配置ができる。 ということであった。 デメリットは、 ・コロナ等による出席停止中の生徒への授業配信や別室登校の生徒への授業配信の際に、子どもたちが1時間ごとにタブレットを持ち運ばなければならない。 ・授業の始めには設定に時間を要し、他の生徒を待たせる時間が生じることがある。 ・時間割変更をする際に、毎回空き教室を探さなければならない。 ということであった。 以上が、現在も今実施しているメリットとデメリットである。 次に教科センター方式をやめた学校についてである。 やめた時期については、平成 20 年頃。 理由としては、 ・教室への移動等で混乱が生じた。 ・生徒の発達段階に見合っていなかった。 ・校舎の構造上、学年、学級の教室がなく生徒の生活できる居場所がなかった。 ・生徒指導上の課題が多かった。 ということであった。 次にやめたことによる影響や変化については、 ・学年、組毎の教室が設定され、生徒の居場所が確保された。 ・教師の目が生徒に行き届くようになり、生徒指導上の課題が減少した。 ということであった。 また、全部を揃えることができなかったが、それぞれの学校の配置図も用意したので聖籠中学校と比較していただければと思う。
町長	これらの学校の校舎は、聖籠中学校とほぼ似たような形になっているのか。
総合政策課 課長補佐	それぞれ特徴的な校舎となっている。
子ども教育課長	教師の教科教務室の配置が違うところもある。 聖籠中学校では、社会科であれば、社会科教室の隣にその教科の教務室があるが、各階の中央にその階にある教科教室の担当教師の教務室があるところもある。
町長	それでは、これについて意見や質問があればお願いしたい。

教育委員	学習センターというものがあったが、それはどのようなものなのか。
教育委員	教科センター方式では、学校サイズも重要かと思う。 教科センター方式は、小規模校では割とうまくいくが、中規模校以上では生徒が移動するので、なかなかうまくいかないということを聞いたことがあるので、各学校の学校サイズ、生徒数、学級数のデータを教えてほしい。 また、教科センター方式は、関心態度意欲も含めて学力向上に成果があるということで、導入した大きな狙いであったかと思う。 メリットとして学力向上があったのかをどのような形で回答できるかは難しいと思うが、可能であれば聞いていただきたい。 そのようなデータがあると、この検討に役に立つのではないかと思う。
教育委員	聖籠町みたいに小学校が何校か集まっているのか、1校の小学校からの中学校なのか。また、授業時間と休憩開始、始業と下校時間を知りたい。
教育委員	小中学校が一緒になっている学校があるがどのような方式なのか。
町長	これらことについて、できる範囲で調査し、報告したい。
教育委員	E校は、ホームルーム教室を設けているとのことだが、子供たちの居場所が確保のために良いと思った。 各校のメリットとデメリットを見ると、メリットは希望というか意欲向上にもつながっているということだが、結局は生徒がどのように感じているかが疑問である。デメリットは、やはりそうだろうと思う部分が多く、デメリットが目立つような感覚を受けた。
教育委員	先生側の意見が多いため、生徒の実際の声を聞けたらお願いしたい。
教育長	メリットの文頭のほとんどに「教師が」、「教師の」という言葉がついている。 デメリットの方は、逆に「生徒が」、「生徒の」という言葉が文頭についている傾向があると思う。 教師にとってはメリットが多く、生徒にとってはデメリットが多いという整理となっているので、本当にそうなのかの確認は必要かと思う。 A校の教育委員会のコメントに「自分で今何をしなければならぬか、指示を受けて動くのではなく、自ら動く習慣付けが必要である。」というものがあったが、このために教科センター方式を実施しているとも読み取れるが、今、聖籠中学校は、教科センター方式ではなく、学級教室的なものを行っているが、生徒の様子を見て「指示を受けて動くのではなく自ら動く」というものは、教科教室でなければ、育むことができないと捉えているのか、それとも今の状況でも、十分自主的に動いているのか、その現状を聞かせていただきたい。
聖籠中学校 校長	自ら動くということの捉え方によるが、自分のことは自分でやるという意味での自ら動くということであれば、教科センター方式では、自分の計画は自分で立てなければならぬため、その部分は育てられるとは思う。 能力差があるので、手をかけてあげなければいけない子どももいるため、一律ではないが、自立はできると思う。

	逆に集団で動くような学校行事や体育祭などは、なかなかできにくくなるのではないかという気がする。学級という母体のない学級集団となると、自ら動くことやリーダー性がない場合は難しくなるのではないと思われる。 今は学級集団で全て学習も行っているので、誰がどういう性格をしていて、どういう友達がいるかなどもわかっている中で役割分担が行われていることから、大きな行事もうまくいっていると思う。 これを教科センター方式、学級方式で比較することは難しいが、現状としてはそのようなことである。
教育委員	学級方式と比べ、教科センター方式では、集団の団結という力が育ちにくいのではないかということであるが、それに対して何か工夫していることがあるかを聞いてもらいたい。
教育委員	聞き方が重要だと思う デメリットは事実であるが、メリットは基本的な理念やこうなってほしいなどの希望がほとんどである。 例えば、教科センター方式を取り入れ、その成果はどうだったかということを中心に聞くと、今後の検討に役立つのではないと思う。 今回の結果は、聖籠中学校に教科センター方式の導入を検討した時に想定されたものがほとんどであると感じた。 今私たちが欲しいのは、教科センター方式を取り入れた結果、エビデンスも含めて、結果はどうだったかというところであると思う。
町長	そこは、我々も一番知りたいところであるため、相手方の協力をいただければ、質問の内容を考え聞いてみたいと思う。
教育委員	聖籠中学校はなぜ2階建てなのか。 2階建てなので、空間が広く移動距離も多く、保護者側から参観日などで行くと教室の場所が分かりづらいとの声を聞く。 3階であれば各学年がそれぞれの階にありわかりやすいため、3階の学校が一般的なのかと思うが。
子ども教育課長	敷地面積を確保した中で、生徒人数を想定し建物を検討し、デザイン性を重視し、2階となったのではないと思われる。
教育委員	生徒人数の規模からすれば、3階か4階になると思うが、なぜ2階だったのかということについては、縦方向に伸びるよりは横方向に広げた方が、子供たちの空間認識から、縦よりも横のほうが伸び伸びと空間が広がるので、心の安定に資するのではないかということで、2階にしたということを聞いたことがある。
総合政策課 課長補佐	残っている資料の中で、設計の理念として、自然に恵まれた周辺の景観に溶け込むように2階建てしたと記載されている。また、防災上の観点から、安全に避難できるように2階建てとし、階段も多く設置したとのことである。

町長	それでは、皆さんからいただいた意見を整理し、再度これらの学校に照会し、その結果をお知らせしたいと思う。 前回は、教科センター方式を導入している他の学校の状況はどうなっているかということだったが、今後は聖籠中学校の教科センター方式を効果の検証も並行して行っていく必要があると思っている。 その検証をどのような形で検証するのが非常に難しいところである。 教科センター方式は、新潟県では聖籠中学校1校しかないため、他に事例はなく、今まで在籍していた先生に対してヒアリングができれば、貴重な意見になると思うので、それも含め事務局で検証方法の素案を検討してほしい。 それを委員の皆さんに諮り、方向性や項目などの意見をいただき、検証を始めていきたいと考えている。 ただし、これはかなり難しく時間が必要だが、これから12月議会、当初予算編成、3月議会という過密なスケジュールの中、この大きい問題を取り扱うのもなかなか難しいことから、新年度が落ち着いた頃に諮りたいと考えている。 できれば委員の皆さんも、この20年間でどういう見方や切り口で振り返ってみるといいかを考えていただければ大変ありがたい。 少し時間が空くが、事務局もかなり大変かと思うので、中学校とも相談しながら、進めてもらいたいと思う。 次回は振り返りと成果の検証方法について議論をしていきたいと思うが、また状況把握に戻ることもあるかと思うが、そこは平行しながら進めていきたいと考えている。急いで検討し誤解を招くことにならないように十分時間をかけて検討していきたいと考えている。 今後のスケジュール、方向性について皆様から意見があれば伺いたい。
教育委員	20年間の評価で、先生方や学校関係者だけでなく、その時にいた生徒や保護者からも、意見を聞くことも検討してほしい。
教育委員	資料等を振り返ると町のいろんな方々が関わって非常に時間とお金と労力をかけて、学校の総意というよりも町の総意として、この学校が20年前に作られたものということを再確認したところである。 この総合教育会議では、私たちが求められているゴールが、私の中で少し曖昧なので確認したい。 今後聖籠中学校の教科センター方式も含めて教育システムのあり方をどうするかということを協議し、何らかの結論を出すかと捉えていいのか。 聖籠中学校は、町の政策として教科センター方式で建設されているので、変えるにしても変えないにしても発展的に何かをするにしても、学校が単独で変えるというものではないため、この会議で何らかの結論を出すことになると思われる。 教育は現在も進んでおり、来年4月の新入生の入学に間に合わせるのか、いつまでにどういう結論を出すのか確認したい。

町長	それについても、この会議で皆さんの意見を聞きながら決めたいと考えている。 当時の経緯からすると町の政策として統合中学校に教科センター方式が導入されたと認識しているので、これを変更することは町の政策として意思決定をしていくことになると思う。 それをこの総合教育会議の場だけで教科センター方式の評価や今後の方向性を決められるのかについては、正直少し荷が重いのではないかとも思う。議論を進めていく中で、もう少し広い範囲での議論が必要になる可能性もあるのではないかと思うが、その段階で皆さんからの意見を聞きながら進めていきたい。 今は、教育関係者と学校で振り返りや成果の検証を進めるにあたって、その手法についてこれからの議論の中で進めていきたい。最終的な形を示すことができず申し訳ないが、そのようなイメージを持っている。
聖籠中学校 校長	まもなく新生の説明会がある。現在の聖籠中学校はコロナ禍もあり人の動きが制限されていたため、学級という固定した学習集団で授業を行っている。コロナ禍も終わり、今の話の流れでは、政策として教科センター方式を行っているとなると来春からは戻さなくてはならない感じがする。 それには準備が必要となるし、皆さんから分析していただき、もし来春、元の形に戻すということであれば、町からの支援が必要となるので相談させていただきたい。
町長	これについては、私の個人的な見解になるのかもしれないが、この教科センター方式は町の政策として意思決定したもので、それに何らかの影響を与えるのであれば、それには町的意思決定が必要になるが、それには当然時間がかかるため、来年の4月というのはとても無理である。 現実的に学校現場でどうするかは、学校が今現在最も望ましいと考える教育のやり方で動いていただければと思う。 それは教科センター方式を継続するとかしないということではなく、子どもたちの教育にとって最も良い方法を校長を含め皆さんで選択し進めていくしかないと思う。
教育長	コロナ禍により学級教室型で何年か過ごしているため、先生方の中でも教科センター方式を知っている人がほとんどいない。コロナ禍が過ぎたから元へ戻した方がいいのではないかということについては、こういった状況の中でわざわざ混乱を起こす必要はないと思っている。 したがって、方向性が決まるまでの間、今取り組んでいる方法を継続することが最適であり、子どもたちの健やかな成長や心身の鍛錬を含め、しっかり落ち着いた環境の中で学習を進めることに尽力していただきたい。
町長	教育長から話があったように、学校には今一番良い方法を選んでいただきたいと思う。 以上で議事を終了する。